

現代アメリカ文学における個人と家

川崎医療短期大学 一般教養

安井 信子

(平成7年9月30日受理)

Individual and Home in Modern American Literature

Nobuko YASUI

Department of General Education

Kawasaki College of Allied Health Professions

Kawasaki, 701-01, Japan

(Received on September 30, 1995)

概 要

日本には「個」が「家」に埋没する伝統的パターンがあるが、世界がグローバルに開かれた現在、新しい個人の在り方が模索されている。では個人とはそもそも何であるのか。「個」の確立志向が強いアメリカの、現代文学を通して個人と家との関係を見てみると、まずサルンジャーの『ライ麦畑でつかまえて』に読み取れるように、現代では「家」の機能は弱く、「個」の確立は孤立へと行き着き、その孤独を破ろうとする試みが繰り返されている。現代アメリカ文学を概観すれば、それがアメリカという国家の成立事情のため、個人が共同体より理念に自己同一化し、個人原理が偏重されたことに由来し、「個」の観念に歪みのあることが理解される。個人主義打開の動きは、例えばトランスバ

ーソナル心理学やペロウの作品にも現れており、月面着陸に係わった宇宙飛行士達の語る、ワンネス(一体)体験に近い感覚が描出されている。「個」の孤立や「家」の拘束を超越する新しい個人の在り方は、今後この方向に提示されるものと思われる。

Abstract

Though Japan has a traditional pattern in which 'individual' is merged in 'home', it is groping for a new way of being an individual. How about the relation between 'individual' and 'home' in modern American literature? "The Catcher in the Rye" by Salinger, for example, indicates that 'home' was lost in a sense and that individualism has come to mean isolation.

A general view of American literature enables us to know that the American idea of 'individual' is at a turning point now. Transpersonal psychology is an eminent example of such a movement, and one of S. Bellow's novels describes the oneness-experience which is similar to what American astronauts talked about. The search for a consciousness open to cosmos seems to be the key to a new existence which transcends the isolation of 'individual' and the restraint of 'home'.

(一)

アメリカ文学を読みながら長らく感じてきたのは、作品の人物や作家の個人の在り方が、日本人とどこか構造的に違うものがある、それは何か、ということだった。個人の違いはその個人を取りまく環境の違いでもある。環境の中でも、最も身近に個人を形成するのは家庭であり、日本とアメリカにおける個人と家の関係の違いを把握しておく

ことは重要であろう。

アメリカ文学から目を転じて、日本の個人と家を見るとき、いわゆる家族制度に代表される、日本の「家」というものの強さ、その影響のすさまじい深さに、つくづく驚かされる。ここで「家」と呼ぶのは、個々人の「個」の確立を阻み、情緒的な融合感、一体感の中に「個」をとどめておくもの、という意味である。この「家」なるものは、各々の家だけでなく、企業、学界、官僚機構、その他様々な共同体、日本の国そのものにも浸透している。(国を国家と呼ぶくらいである。)それは日本の文化全般、日本人の深層に根を下ろしているといえよう。

従って、近代日本における「個」の自覚は、例外なくこの「家」との闘いという形をとったと、川本彰氏は指摘している。例えば芥川龍之介は、「人生の悲劇の第一幕は親子となったことにはじまってる」と言った。永井荷風は「血族の関係ほど重苦しく、不快極まるものはない、」なぜならほかの関係は自己が「意識して結んだもの」だが、「親兄弟の関係ばかりは先天的にどんな事をしても断ち得ないもの」「ファミリー」(運命、宿命)だからだ、と述べた。高村光太郎はパリで「個」の覚醒を体験し、帰国して次のように書いた。(傍点は注のない限り筆者による。)「私は一個の人間として生きようとする。／一切が人間を許さぬこの国では、／それは反逆に外ならない。／父や母のたのしく待った家庭の夢は／いちばん先に破れるだらう。」このように「家」に反逆する者は、「家」の原理で動く社会そのものに反逆することになる。光太郎は、個人として生きるために「日本の事物国柄の一切を／なつかしみながら否定した」と述懐している。

ではこうして「家」と闘った個人達は、見事「個」の確立を成し遂げたのか。周知の如く、事はそう簡単にはいかなかった。これは、人が大きな危機に直面したときどうするかを見ればよくわかる。なぜならそれは、その個人が何によって根本的に支えられているかが露呈する時だからだ。例えば日本の一切を否定したはずの光太郎は、太平洋戦争勃発という危機に臨み、「遠い昔が今となった。／天皇あやふし。／ただこの一語が／私の一切を決定した。／子供の時のおぢいさんが、父が母がそこに居た。／少年の日の家の雲霧が／部屋一ぱいに立ちこめた。／私の耳は祖先の声でみたされ」と、戦争協力を決意したことを歌っている。これは明らかに論理的、主体的決断ではない。彼は突如として、「本能のやうに」自分個人を凌ぐ強い力に圧倒されたのだ。それは「少年の日の家の雲霧」であり、「父や母」「祖先」によってひきおこされる情緒的一体感、つまり「家」の原理なのである。

丸山真男氏は『日本の思想』の中で、色々な思想を「雑然同居」させ、新たな思想や本来相容れない異質な思想まで、「過去との十全な対決なしに」次々に取り入れるという日本の伝統を、「無構造の伝統」と呼び、そのため「危機の場合：日本社会あるいは個人の内面生活における『伝統』への思想的復帰は、：人間がびっくりしたときに長く使用しない国訛りが急に飛び出すような形で：行われる。その一秒前まで普通に使っていた言葉とまったく内的な関連なしに、突如として『噴出』する」と述べている。(傍点著者)この「国訛り」とは、幼時から人の中にしみ込んだもの、判断や選択をするようになる前にその人の中に取り込まれてしまったものだ。これはまさしく、光太郎が「少

年の日の家の雲霧」と呼んだもの、つまり「家」の原理にほかならない。このように、自立したと思っていた個人は、危機に直面すると自分でも思いがけず、突然「家」に身を屈するのだ。というのは、日本の「家」は、対決、分離、構造化と原理的に相容れない「無限抱擁」、自他融合の世界であり、その成員の「個」の確立を拒むというより、初めから自己と「家」との境界が曖昧になるように個人を形成する。

従って不意を打たれたり大問題に出会うとき、個人は自己を主体として決断することができず、ちょうど子が思わず母にしがみつくように、「個」は「家」に回帰してしまうのである。

日本が母と子の結びつきの強い社会であることは、河合隼雄氏をはじめとして、多くの人によって指摘されている。ここでいう「母」とは、個々の母親ではなく、機能としての母、母なるもの、という意味であるが、「母」は「子」を慈しみ包み込むもの、「子」と融合一体化するものである。従って「母」には「子」を自分から分離させたり、「子」を自立させたりする働きはない。「子」の「母」に対する自己の境界が曖昧なままである限り、「子」は決して大人にならないことは明らかである。とすれば、人が「個」として主体性をもつことを許さない「家」の根底に働くのは母性原理であり、「家」から個人として独立しきれない日本人はすべて「子」ということになる。光太郎は有名な「道程」で、「僕の前には道はない／僕の後ろに道は出来る／ああ自然よ／父よ／僕を一人立ちにさせた広大な父よ」と歌っているが、誠に一人立ちするには「父」が必要だ。母性原理に対する父性原理としての「父」が欠落した、母性社会日本の中では、欧米思想における意味

での「一人立ち」は、一般的に不可能であった。

この傾向は今も続いている。私達日本人は大きな危機に直面すると、個人として主体的に決断するよりも、家や組織、共同体など、自分をまるごとかかえてくれる何かに、思わず回帰する傾向を意識下にもっている。昔はそういう日本人を受けとめてくれる母性原理の「家」があった。しかし世界がグローバルに開かれ、国際交流が不可欠となった現在、日本的「家」システムはうまく機能しなくなってきた。

なぜなら「家」的人間関係は日本の中ではまだ有効でも、他国とつきあつていく上では役に立たないからだ。他者と対等に渡りあえるのは「一人立ち」した大人である。こうして日本人の中でも「一人立ち」した主体的個人としての在り方が求められ模索されている。では私達はいかにして「一個の人間」をめざすべきか。そもそも「個」とは何であるのか。

(一)

「一個の人間」という理念はいうまでもなく欧米文化に由来するものであるが、とりわけ「個」の確立志向が強いといわれるアメリカでは、「個」や「家」はどういう形をとっているのか。ここで日本でも親しまれているサリンジャーを取りあげてみよう。一九五一年、代表作『ライ麦畑でつかまえて』が出版されると、アメリカの若者達の間には熱狂的共感の嵐を巻き起こし、六十年代には国際的ベストセラーとなり、七十年には三十ヶ国語で出版されたというから、その反響のすごさがうかがえよう。ところが彼の伝記的事実については殆ど知られていない。それは異様といつていいほどで、伝記を書くにも誰にも書

けなくらいである。というのは彼は余りにも騒がれるのを嫌い、自分のプライベートを固く守り、高い塀に囲まれた自宅に引きこもって、ジャーナリズムや世の中との接触を避けているからである。

さて、『ライ麦畑でつかまえて』の主人公ホールデンは、十六歳の少年で、これまで名門校を二度退学になり、三度目で名門校をまたしても退学になる所から話は始まる。退学の理由は五教科中四教科まで落第したためだが、及第の一課目（英語）はトップの成績をおさめているから、彼は頭が悪い訳ではない。ただ興味のない課目ははなから勉強しないうえに、そもそも彼はその学校を嫌悪している。彼にとつて学校は、利己的な学友や教師の偽善に充ちた、「インチキ」な世界なのである。とはいえ、退学通知が届いたら親にひどく叱られることは目に見えている。そこでホールデンは、その前に三、四日一人でニューヨークに行き、息ぬきをしてから家に帰ろうと決心し、寄宿舎を出ていく。

しかしニューヨークには来たものの、一人ぼっちでする事もなく、誰かと話をしたいのだが相手もない。ホテルに泊まって行きずりの人々と言葉をかわすが、心が通じるはずもなく、却って傷ついていくばかり。季節は冬、骨までしみる寒さが、一人の少年にはもちこたえることができないほどの孤独感と巧みにダブらせて描写されている。ついに耐えきれなくなったホールデンは、妹と話がしたくなって一度家に帰り、それから以前名門校にいた教師でただ一人尊敬していたアントリーニ先生の家に泊めてもらうが、夜中に目が覚めると先生がそばにいて、ホールデンの頭をなでていたという出来事があつて肝をつ

ぶし、その家をとび出してしまふ。こうして身を寄せる所がなくなつたホールデンは、西部のどこかへ行き牧場で働こうと考えるが、妹に別れを告げる時、土砂降りの雨にぬれて肺炎になり、病院で静養しながら、それまでのことを話すという設定になつていく。

このように荒筋だけ見れば、ホールデンは典型のおちこぼれタイプであるが、注目に値するのは、日本と違って家に閉じこもる登校拒否症にはならないことだ。主人公の心の世界は淋しく荒涼としているのに、彼の語り口はさらりとフランクで、時に軽快な明るささえ感じさせ、ホールデンが決して敗北してしまふのでなく、立ち直り歩き始めるだろうという予感を読者に懐かせる。なぜなら彼は、自分が弱虫でドジであることを承知してはいるが、彼の内部に毅然として揺るがぬ価値体系があつて、それが彼を支えているからだ。そのために、彼は社会に対する痛烈な、胸のすくような批判を言い放つことができるのである。彼が名門とされる学校をくり返し退学するのも、この確固たる価値観ゆえに、利己主義、自己満足、自己顕示で一杯の学友や教師父兄の「インチキ」さに我慢できないからだ。

ホールデンの価値体系の根幹は、一言でいえば無私の心から生ずる美しさである。例えば子供の無心な表情や行動とか、ティンパニーの打手で、自分の出番は一曲に二回しかないのに打たない時も退屈そうな顔をせず、打つ時は実にきれいな音を出す人とか、レストランで出会つた、とてもやさしい顔の感じのいい尼さんなど、彼が賛美するのは、私心や自我のない美しさである。この無私の美とエゴイズムの醜さを識別する、非常に鋭い感性をもっているホールデンは、人間であ

ろうと美術品であろうと、一瞥のうちに本物かインチキを見抜く。その目の確かさは爽快な程であり、インチキで充滿したこの社会において、退学、敗北、入院など一見おちこぼれと見える彼の動きは、社会通念に曇らされぬこの感性がいかに優れているかを逆に証明しているのである。しかし問題は彼を支えるものがその感性だけだということだ。それはどうやら生得的なもので、発展や変化はなく、通じない人には伝えようがない。この自己の感性に一人立てこもる彼は、終始一貫孤立無援であり、この孤独こそ彼の最大の苦悩なのである。

ではホールデンにとって、家庭は助けにならないのだろうか。退学が決まったとき、彼は学校をとり出して我が家ではなく一人ニューヨークに向かう。つまり親は彼にとつて余り大きな意味をもたず、むしろ学校、社会の側に立つて彼を脅かす存在である。ニューヨークの店で大人に「何歳だい。さつさと家に帰って寝るこつた」と言われ、彼は「八十六歳。帰る家がないんだよ」とやり返すが、このジョークは実は彼の本音なのだ。自己の価値体系はインチキな大人どもを遥かに凌ぐ厳然たるもの、しかし心身は子供と大人の境にあつて弱く不安定、そういう彼を受けとめてくれる所——帰るべき家がないという意味である。ホールデンは、「セントラルパークの池のあひる達は、冬になつて池が氷に閉ざされたらどうするのか、誰かがトラックか何かでやって来て連れていくのか、それとも自分で南かどこかに飛んでいくのか」と何度も気にして、最後に自分で見に行くのだが、冷たい世界で行き場をもたない彼の心情がにじみ出ている、読む者は胸のつまる思いがするのである。

彼はニューヨークでますます孤独感を深め、傷心の余り一度家に帰るけれども、両親に見つからないよう苦労してしのびこんだり、母親がやってくるのと押入れに隠れたりして、実は家に帰るのではなく、可愛い妹に会いに帰っただけであることは明らかだ。妹のフィービーは、彼より利発で、美しく思いやりのある十歳の子供として描かれている。本質的にはホールデンに似ているが、幼いだけに一層純粹無垢で、彼のように社会から迫害される心配もない。つまりフィービーは、彼にとって自己を理想化した一つのイメージなのだ。彼には十一歳で亡くなった弟のアリーがいるが、アリーは神童といわれた程才能、人柄ともに類まれな子供だった。また、ハリウッドに住む流行作家の兄がいて、折角の文学的才能を持ちながら映画界に「身売り」したというので、ホールデンは兄を「インチキ」側に分類している。従つて彼には家族らしい家族がなく、あるのは両親、兄が属するインチキな現実社会側と、妹、亡き弟から成る美しい理想側だけである。子供を育み、その未熟な理想世界から大人の現実世界へと成熟させていく場としての家族が、ホールデンにはないのだ。そのため彼は苛酷な社会に直面し、傷ついて崩壊しそうになると、愛する妹や弟を思い出しては自分を立て直す。しかしこれだけでは、現実世界に足場を作ることにはできない。

この点を妹に見抜かれて、「お兄ちゃんは嫌いなものばかりなのね。好きなもの、なりたいたいものがあつたら言ってみて」と問いかけられ、彼はこう答える。

僕にはね、広いライ麦畑やなんかで、小さい子供達がみんなで何か

のゲームをしている所が目に見えて浮かんでくるんだよ。何千っていう子

供達がいる、辺りには誰もいない——誰もって大人はだよ——僕のほかにね。で、僕は危ない崖のふちに立っているんだ。僕のやる仕事はね、子供が崖からおちそうになつたらつかまえることなんだ——つまり子供達は走つてるときにどこを通つてくるかなんて見やしないだろう、そのとき僕はさつとび出して来てその子をつかまえてやらなきゃいけないんだ。一日中、それだけをやらばいいんだな。

ライ麦畑のつかまえ役、そういつたものに僕はなりたいたんだよ。……馬鹿げてることは知ってるけどさ。(二七三頁)

とりわけ印象的なこの場面は、子供だけの光輝く世界であり、ホールデンの生命の喜びの原風景といえよう。しかし彼はそれを現実世界に生かすことができない。現実への入門は崖からの墜落という形で表される。十六歳という成熟の時期に適切な入門の指導者をもたなかったホールデンは、彼の最高の価値をこのようなイメージでくりひろげ、それを守ろうとし、その輝ける無垢イノセントによつて社会に対抗しようとした。しかし西部へ行こうと決心して、妹に「私も連れていって」とせがまれたとき、無垢イノセントというものはガラスケースに宝物を入れて守るような具合にはいかず、子供はいつか無垢の世界から出ること、この理想世界を守ろうとすること自体幻想にすぎないことを悟る。そのとき雨にずぶぬれになりながら突然幸福感で満たされるのは、この幻想を手放し、子供は子供の時だけ無垢に輝く、それでいいのだと、子供時代に別れを告げたということだ。しかし現実世界に入る手ほどきをしてくれる者はなく、彼はどちらの世界でもない病院に一時身を置くことに

なるのである。

一般にアメリカの家庭では、親子のタテ関係より夫—妻のヨコ関係の方が遥かに強く、親が子の価値形成を指導できない場合、タテ関係はごく薄いものとなる。例えばサリンジャーの他の作品に登場する七人の兄弟姉妹は、父母をファーストネームで呼ぶ。つまり父母は彼らにとつて親というより別個の個人であり、家は個人の集まりにすぎない。彼らの核心的価値は親によつて伝承されるのではなく、天性の資質から生じる。入門イニシエーションの指導者をもたない未成年者が社会に対して自衛するには、生得的長所を拡大するほかない。だから作者の分身ともいえるこの七人は、一人残らず神童や天才ということになっている。彼らは無私の愛を体現しようとするが、その卓越した感性、才能と、世間一般との落差が大きすぎて、コミュニケーションでできる相手が限られてしまう。つまり自分の方はパツと奥まで解つてしまつて相手が全然解らないというとき、話のしようがないのである。これはサリンジャーの作品における男女関係にも言えることで、総じてよい関係の男女のカップルは登場しない。うまくいっている場合は、一方が身近にいない場合か、非性的関係（兄と妹、大人と小児、詩的非現実的異性と関係）の場合である。従つて読者を魅了するサリンジャーの純粋な世界は、こうした親子、男女という自然な人間関係が欠落した所に成り立っている。このように孤立した「個」の世界にとどまっている限り、内的価値の優越性をいくらエスカレートさせようとも、その不毛化は避けられない。これがサリンジャーの作品には顕著に表れているのである。

(三)

家庭や女性が欠落し、人が単一で世界と向かい合うという際立った「個」の確立の傾向は、アメリカという国の成立事情が大きく影響している。国はふつう、人間と自然が長い歴史を通して相互に働きかけながら作られていくものだが、アメリカでは、既に高度の文明をたずさえた人間が、突然十七世紀に素裸の荒野に、聖書(神)による国を築き始めたのだ。十九世紀、自信をつけた人々の前に広がるのは広大な西部、可能性にみちた手つかずの自然だった。そのとき人間というものをアメリカ人はどう捕えたか。R・W・B・ルイスによれば「歴史から解放された個人：一人で立ち、自らに頼り、自らの力で前進し、自分独自の生得の力により、何が待ち受けていようともこれに立ち向かう用意がある」人間、エマソンの言葉を借りると「素朴な昔のアダム、全世界を向こうにまわして立つ、単純で純粋な自我」である。それは罪悪と誤謬の旧世界を捨て、歴史を捨て、新世界に立つ無垢のアダムである。

ところで西洋では神を「天にまします父」と呼ぶことから解るよ様に、西洋は父性原理の強い社会と言われる。長い歴史を経て文明が築かれたため、土着の共同体が堅固であり、父なる神を頂点とするその文化を継承し伝えるのは家父長——父の役目であった。アメリカのアダムが「歴史から解放され」たことはこの「父」を捨てたことであり、父性原理は個人原理にとって代わられたのである。この個人・人間は man、つまり男性であるから、個人原理は同時に男性原理でもあった。こうして個人は歴史の産物に背を向け、徹頭徹尾単身で立つ。

例えば十九世紀初めのクーパーという作家は、アメリカ的素材を採用した最初の作家とされているが、その代表的主人公ナッティ・バンポは、辺境に一人で暮らす強く高潔な白人であり、最後まで文明の中に組み入れられることなく、大自然と共に生き、「高貴なる野蛮人」として大往生を遂げる。彼の人間的成熟は、老練なインディアンとの戦いに勝ち、死んでいくその敵に祝福されることによって達成される。若者に通過儀礼を施すのは家、共同体ではなく、インディアンをたづなつた大自然なのだ。フロンティアはナッティにとって自分が帰属できる無限の世界であった。

ところが社会の矛盾が露呈し始めた十九世紀半ば、『白鯨』で有名なメルヴィルにとって、世界は不当な運命を強いるものとして認識された。巨大な白鯨は、無限を追求する人間の行手を阻む壁の象徴といえる。白鯨を仕留めんとするエイハブ船長のピークオド号には、人類的縮図ともいふべき多種多様の人々が乗っており、船は「まさに世界の雛形であった」が、その「世界」には女性も家庭も含まれていなかった。船は家庭の象徴である炉端や港から敢えて遠ざかり、海という「荒れ狂うあの無限のさなか」に出帆する。ついに白鯨と対決し壮烈な最期を遂げるエイハブにとって、世界とは帰属できる所ではなく、無限を求める「個」を破滅させるものであった。

しかし、世界の奥に無限を感じし、命をかけて係わりえた——無限を背景とする個人でありえたという意味では、エイハブはまだ幸福だったといえる。十九世紀末、広大な西部が開拓されつくし、アメリカの無限性の象徴であったフロンティアが消滅したとき、その無限性に

依拠していた個人達は、存在の意味の基盤を失った。ステイーブン・クレインは次のような短詩を書いている。「一人の男が宇宙に言った／『私は存在している／』と／宇宙は答えた／『だからといって私には／何の責任もないことだ』」個人にとって世界が人間性のない、非情なものになりつつあったことが伺える。

二十世紀前半、この非情な世界で行動家としても名を馳せた「男性的」作家、ヘミングウェイは、その名もズバリ、非情な文体——一切の無駄や感情を切り捨てた文体で有名になった。彼にとって、苛酷な現実の無意味さに直面するときの個人のストイシズム、勇氣、尊厳だけが、最後の拠り所、残された唯一の名譽である。彼がサファリや闘牛に熱中したのも、一つには極限状況に臨んでそれを確認するためだった。ただ問題は、虚無に毅然と対峙しうる「個」の精神力だけに自己の存在が掛かっている人間は、衰えたとき支えてくれる何ものもないということだ。その場合、無意味によって自己が解体されることを拒否するため、自ら存在に終止符を打つ以外に道はない。ヘミングウェイの獵銃による自殺は、独力で無限に向かう自由な個人という理念が行き着いた一つの袋小路といえよう。

それから約二世代後のサリンジャーは、ハードボイルドに對抗して「やさしい軍曹」という短篇を書き、ホールデンに「武器よさらば」をインチキと呼べせたりして、ヘミングウェイを嫌った。そもそも弱者を自認するホールデンは、愛する弟が病死したとき、悲嘆の余りガレジの窓を拳で全部叩き割って手を負傷し、その後遺症で拳を固く握ることができなくなっているのだが、これは殴り合いや闘いの否定を

象徴している。学校でフェンシングチームのマナージャーをやりながら、うっかり装具を地下鉄に置き忘れて試合に行けなくなったり、校長に「人生は競技だ」と説教され、「競技だつてさ、クソくらえ。優秀な奴らが揃ってる側についてるなら、人生は競技で結構だろうよ。だけど反対の方についてたら、人生何が競技だい」と咄くホールデンは、アメリカの伝統的ヒーロー、戦う強者とは反対に、弱い者、繊細で心やさしい者というアンチヒーローだ。

ホールデンが学校で、お気に入りの赤いハンチング帽を目深にかぶり、ふざけて「暗いよ、見えないよ、ママ、手を貸して」と手探りして、ルームメイトに「幼稚なまねはよせよ」と言われる所がある。視覚は世界を主体と客体に分ける武器といえるが、欧米文明はいわば視覚が他の感覚を圧制する文明である。また特にタテ関係の稀薄なアメリカは、「母」に依存することが恥辱とされ、親が子に情の絆を与えるよりも、早く自立することを期待する社会である。ホールデンが「見えないよ」と視覚を遮断し、「ママ、手を貸して」とふざけるととき友人が苛立つのは、そういう社会の個人原理、男性原理偏重を諷刺しているからだ。アメリカからフロンティアが消失し、無限の背景が失われて以来、個人という言葉は、ときとして強者ばかりのさばる一人よがり、自分勝手、或いは自分一人であることの空虚さを表す言葉となり、個人主義はエゴイズムと化してしまった。ある社会学者はこの問題を次のように述べている。「殆どのアメリカ人にとって人生の意味とは自分独自の人間になること、つまり家や共同体や先人の考え方から解放されることだった。かつての小さな町や教会は偏狭で抑圧的だ

ったので、今日のラディカルな個人主義にはその反動という面もあるが、私達は過去の抑圧からの解放を切望して余りに多くのものを放り投げてしまった。今私達は『結局人間は一人つきりなのだ』という言葉のニヒリズムや、恣意的価値観の空虚さを乗り越える道を見つげようと懸命になっている。』バラバラに孤立した個人や殴り合う個人ではなく、手を繋ぐ個人を人々が暗中模索していたからこそ、サリンジャーは熱狂的に歓迎されたのである。

しかし、成熟の導きとなる家、共同体、大自然もなく、せめぎ合うエゴの中で、自分の感性だけを頼りに社会の醜さを拒み続けたサリンジャーは、「個」の殻から抜け出ることができなかった。確かにホールデンは弱者や無垢の者に共感し、闘いにエゴイズムを嗅ぎつけ拒否するけれども、殴り合いが苦手なばかりか「相手の顔を見ていられない」、「あごに一発くらわされるよりは、窓から放り出すかそいつの首を斧でちよん切る方がまだやりいい」という彼の戯言は、自己防御のために自分の世界から安易に他者を抹殺する傾向があるという、作者の弱点を暴露している。次々に心の中で人を捨てていけば、誰もいなくなることは明白だ。その無人世界の孤独からどうやって脱出し、人々とコミュニケーションするか——これが『ライ麦畑でつかまえて』以降の彼の最大のテーマであった。彼は禅など東洋の宗教に接し、無差別にインチキなものも美しいものも差別せず、すべてを愛することを目指した。だがそれは観念の域を出ず、実感として体得するまでに到らなかった。無我の探求は「個」を超える方向に導かず、聖性という観念の鎧を作り、サリンジャーの「個」を守りかつ幽閉した。今も彼がそ

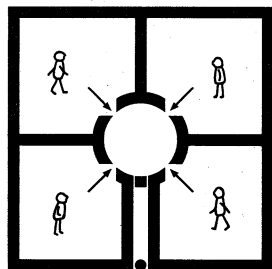
の鎧に閉ざされていることは、高い塀に守られひっそりした彼の家が示すとおりである。

(四)

「インチキな奴だけどふつと気の毒になる、なつかしくなる」とホールデンに言わせ、「皆が同じ格好の家に住み、同じような顔をしていればいい、そうすれば自分と他人の家族を間違えて、皆親しくできよう」と一人の「神童」に言わせるまでに、連帯融和を望んだサリンジャーが、このように世間から孤立してしまったのは皮肉であるが、日本人が概して自他融合の「家」に立ち戻るのに対し、アメリカ人は自己の価値体系、「個」の中に立てこもる。この相違の根底にあるのは、自己を規定し支えるものを決定する自己同一化の問題である。中根千枝氏による集団内部構造の図を利用させてもらえば、これは次頁のように図式化できる。(図1)

欧米では個人は集団を統べるルール即ちロゴス(神、論理、価値)に同一化し、精神内部に超自我を形成し、それを自己の核とする。日本では「家」という集団の融合一如を理想とする人間関係に同一化し、個を曖昧にして帰属感を支えとする。家庭の中で祖父母、父母が互いに、「おじいさん」、「おばあさん」、「お父さん」、「お母さん」と呼び合うのは、「家」の人間関係が個対個の関係に先行し、その中の役割を自己とするからであるし、そもそも日本語では「私」、「僕」、「俺」等の一人称さえ、自分を囲む人間関係によって決定される。「家」共同体に同一化する日本人は、「家」的場から外に出ると支えを喪失するが、欧米の個人は内部にロゴスという同一化の対象をもつ限り、異質な社

〈イギリス式〉



〈日本式〉

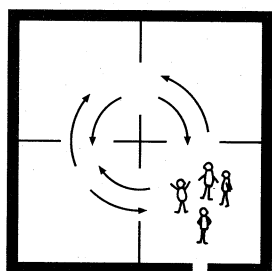
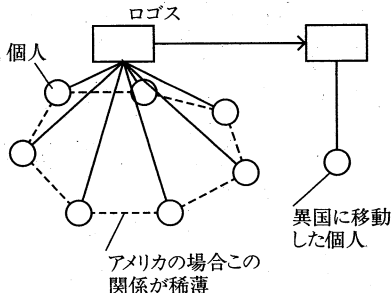


図2 家族成員の配置と動き方

〈欧米〉



〈日本〉

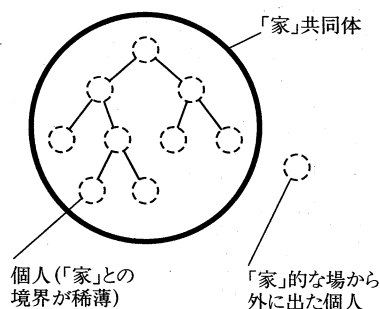


図1 個人と共同体の関係

会に移動しても確固とした自己を保持できる。図2は家と家族の配置、動き方を単純化した図である。イギリス式の家は堅牢な個人の部屋と、ロゴスの役目をもつ中央の共同スペースから成る。日本の場合、家の殻が堅固で個室の仕切りは弱く、むしろ家は機能的に分割され、団樂を理想とする。図1と2が構造的に対応していることがわかりであろう。

アメリカの「個」の特異性は、ヨーロッパの歴史風土の中で成立した理念を、無人の（白人の視点からすればだが）原野に移入したため、一層強く己の理念を振り所とせざるをえなかったという点にある。ヨーロッパのように狭い定住共同体では、摩擦や風化によって個人も理念も現実に妥協した形となる。しかしアメリカにはそういう歴史のかわりに無限のフロンティアがあった。それは萎縮した人間の心に伸びやかさを取り戻し、西部即ち希望となった。切端詰まったら西部へ行くというパターンは、ホールデンの中にさえ残っていたではないか。こうして個人は高々と理念を掲げて独走し、自然な共同体的人間関係はそれだけ稀薄になった。しかしこの個人原理を支えたフロンティアはもはや存在しない。自然は無限ではなく、南極まで汚染された地球は有限な生態系だということに気付いた今、個人原理偏重を見直す必要がある。個人とは前述の如く男性を意味したが、今世紀半に女性も個人に加わりと子供だけが個人から取り残され、父親母親が各々の個性を主張し、理想的ヨコ関係を追求する結果、離婚家庭が50%を越え、子供が最大の被害者となり歪んだ個に育っていくという深刻な社会問題は、それを例証している。

サリンジャーと同世代のノーベル賞受賞作家ソール・ペロウは、一九六四年、『ハーツォグ』という小説を書いた。著名な知識人であるハーツォグも二度離婚している。特に二度目の妻は彼の友人と密通して卑劣な手口で離婚を強要し、彼は憎むべき妻との間の子供達に対する切ない愛情に苦しむ。度重なる打撃に錯乱状態に陥る彼は、欧米文明のエリートの特異性を象徴する。しかし田舎の自然の中で徐々に

回復していく彼は、自己崩壊を経たからこそ、最後には理性では解らないもの、「自分が、いやすべての人がその中に入っていける何か偉大なもの」に頭を垂れ、心に安らぎを取り戻すのである。この小説が純文学としては珍しくアメリカでロングベストセラーとなったのは、己を根底で支えるものを求め続ける個人達の熱心さの証拠であろう。「ハーツォグ」にも見られるように、離婚の激増による人間関係の混乱の中で、「個」を支えるためにアメリカでは従来の家族に代わって、幾度もの離婚再婚による人為的ネットワーク家族——個人原理に基づく合理的契約関係——を作り実践している。こうした努力を真剣に続ける人ほど、親子・血縁関係は究極的には「個」の意志を超えて続く運命的絆であることを痛感し、個人としての独立性を侵害せずしかも人間として自然な関係を模索しているようである。

それとは逆に、荷風が「断つことのできない運命」と呼んだ「家」的人間関係に呑みこまれ、抜け出せないのが日本人の問題だ。国内では「家」から異分子を排除し、国外では寄り集まって「家」的場を作りあげて、一如の世界が保存され、「個」は確立のしようがない。戦後アメリカはこの「家」制度を撤去しようとしたが、伝統的家族制度は壊れても、「家」の根本にある母性原理は社会に氾濫している。例えば高度成長の担い手となった会社人間は、企業という「家」的組織に同一化した、会社の「いい子」にすぎず、その妻は子供と共に閉ざされた母子関係の泥濘の中であがいている。「ライ麦畑でつかまえて」の凍った池のあひるも孤独で辛いだろうが、日本のように生温い密室でドロコンロレスリングの如き癒着状態にはまった状況もやりきれない。

ではどうしたら抜け出せるのか、私達は何に立脚すればよいのか。

「個」の確立は日本も通らざるを得ない一つの段階であろう。基本的に人間は「一人立ち」すべきもの、男女を問わず経済的、精神的、生活的に自立すべきものだ。皆が企業や世間の言うなりになって、定年後にささやかにやりたい事をやる社会ではなく、子供から大人に移る時に「私は何なのか」、「私は本当は何がやりたいのか」と自問し、答えを探し、実現していく社会、個人が自立した社会が望ましいのはいうまでもない。とはいえアメリカ的「個」の確立を模倣する必要はない。アメリカの「個」は、生物としての人間に与えられた成長——老老化という山型のライフサイクルのうち、ピークだけを抽出した観念である。人生のフィジカルな最盛期のみを人間の基準とすれば、幼年期、老年期、病氣等弱い部分が当然あることや、人はピークにおいてさえ自己完結的存在ではなく、他との関係のうちに生きていることが忘却され、必然的な老いと死から顔を背ける結果となる。本来ライフサイクルのどの時点における自己も、かけがえのない自己のはずであり、ピークは麓もとがあつてこそ存在しうるものだ。

日本では伝統的には「家」共同体が、幼児、老人、病人等麓もとの部分にケアしてきた。現在はその役割が例えば在宅老人介護のように女性に課せられているが、これは本来社会システムが担うべき機能である。弱い部分を見守り支えるこの働きを、文化の中の「母性」、正確に言うところ「親性」と呼んでいいだろう。この親性が切り捨てられ、しかも「個」が確立していない社会——親不在の、未成年者ばかりの社会が現代の日本だ。いじめ、家庭内暴力、公害、自然破壊の根はここにある。し

かし日本の文化には「親性」に対する優れた感覚があったのではないだろうか。「個」以前の、「個」を含む大きなものに対する感受性が備わっていたのではないか——例えば無数の泡を浮かべた巨きな流れがあつて、個々人はその一つ一つの泡であり、別々に見えるけれども同じ流れに浮かんでおり、消えれば同じ一つの流れに戻るといった感性が。この流れを握り所にできれば個人は本来の安定を得るに違いない。

アメリカでは、トランスパーソナル心理学に代表されるような、個人を開き個人を超える動きが出てきている。前述のペロウが一九八三年に著した、『学生部長の十二月』にもそれが瞥見できる。主人公コルドは初老の学者で、孤立や疎外の苦悩を経て、最後に天文学者である妻とパロマ天文台に行く。巨大なドームが開き、宇宙を垣間見る時、コルドは自由と解放を体感し、同時に石、樹、動物、人々、星々と自分が繋がっていることを感得する。彼の言う自由、解放が、個人が何から切り離される解放ではなく、繋がりの中での自由であることは注目に値する。コルドのこの感じ方は、一九七〇年頃、宇宙から地球を眺めた宇宙飛行士達の体験を思い出させる。宇宙飛行士ジーン・サーナンによれば、

宇宙から地球を見ると、そのあまりの美しさにうたれる。：肉眼で見る地球と写真で見る地球は、全くちがうものだ。：地球の向こう側は何もない暗黒だ。その黒さの持つ深みは、それを見たことがない人には絶対に想像することができないだろう。あの暗黒を見たときにはじめて、人間は空間の無限の拡がりや時間の無限のつらなりを共に実感できる。永遠というものを実感できる。(『宇宙からの

帰還』二六五―二七〇頁)

特に衝撃も受けなかったというポール・ワイツさえこう告白する。

地球はあまりに美しかった。それを見ていると、ボクは地球の一員だという、地球への帰属意識が、きわめて強烈に生まれてきた。ボクはアメリカ国民だとか、テキサス人だとか、ヒューストン市民だとか、そういう意識は全く出てこなかった。ひたすら地球への帰属意識だ。(同三二七頁)

言葉では伝えることができない体験だが、と前置きしてラッセル・シユワイカートは語る。

自分を自分という一個人と見ることができなかった。「人間がそこにいる、そこで人間がこんなことをしている」と、個人ではなく、人間という種が見えたのだ。：私は人間という種のセンサーだ、感覚器官にすぎないと思った。それは私の人生において、最高にハイの瞬間だったが、エゴが高揚するハイの瞬間(ハイの瞬間はたいていそうなのだが)ではなくて、エゴが消失するハイの瞬間だった。：宇宙から地球を見たとき私の受けた精神的インパクトは、ちょうど、人間の体内にいたバクテリアが体外に出て、はじめての人間の姿全体を目にして、それが生きて動いていることを知ったときに受けるであろうようなインパクトだったのだ。(同三五―三三八頁)

私達一般人はまだ地球を離れたこともなく、彼らの体験は実感としては解らない。しかしその体験が、個人主義的孤立でもなく、「家」共同体に呑みこまれてもいない、途方もなく大きい直接体験だったのだという事は察知できる。彼らが宇宙体験をしたあと一人残らず、否応

なく生き方が大きく変わってしまったことを知るとき、その体験が決して一時的刺激ではなく、真に根源的体験だったのだらうと思わざるを得ない。彼らが宇宙体験後十年経って、インタビューアーの立花隆氏に述べたのとちょうど同じ頃に、ペロウが天文台での宇宙の感動を描いているのは偶然ではあるまい。宇宙飛行士達が「地球への帰属意識」を覚え、自分は「個人ではなく人類の感覚器官」だと感じたそのワンネス（一体）体験が、一部の人間だけでなく、また頭の理解だけでなく、人々の実感として広まっていくとき、「個人」でも「家」でもない新しい人間の在り方が現れるにちがいない。それをアメリカ文学の中で探っていくのはこれからの大きな課題の一つとなるだろう。

注

- (1) 安井信子『へ個』を超えて』(和泉書院) 一〇八頁 一九九四年
 (2) 中根千枝『適応の条件』(講談社) 一〇〇—一〇二頁 一九七二年

文 献

- 丸山真男：『日本の思想』(岩波新書) 一九六一年
 J. D. Salinger: *The Catcher in the Rye* (Bantam Books) 1951
Fanny and Zoey (Bantam Books) 1961
 R・W・B・ルイス：『アメリカのアダム』斎藤光訳(研究社) 一九七三年
 中根千枝：『タテ社会の人間関係』(講談社) 一九七七年
 川本 彰：『近代文学に於ける「家」の構造』(社会思想社) 一九八〇年
 Saul Bellow: *Herzog* (Penguin Books) 1964
The Dean's December (Harper & Row) 1982

立花 隆：『宇宙からの帰還』(中央文庫) 一九八五年
 R・N・ペラー他：『心の習慣』島菌進・滝野功訳(誠信書房) 一九九一年